

コリント人への手紙第二3章18節 「栄光から栄光へと」

1A 覆いを取り除かれた顔

2A 主の栄光を見る

3A 主の似姿に変えられる

4A 御霊なる主の働き

本文

私たちの学びは、コリント第二3章に入っています。午後一節ずつ見ていきますが、今朝は、18 節に注目します。「**私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。**」

私たちは、3 章 5 節のところを先週の礼拝で見ました。「何かを、自分が成したことだと考える資格は、私たち自身にはありません。私たちの資格は神から与えられるものです。」私たちには、何かを成したと言えるような資格がないということを見て行った時に、自分自身の内には良いものがないことを徹底的に見てきました。自分が良い人になるのだ、自分自身が向上するのだ、というようなことを期待して信仰生活をすれば、全くそうでないことに気づき、落胆し、葛藤するだけだということを見ました。今回は、その反対です。自分自身を見るのではなく、主ご自身を見上げることで、自分自身の内を見るのではなく、主の栄光を見ていく時に、主と同じかたちに姿を変えられていくということです。

内ではなく外を、内ではなく上を見るということについて、私たちのよく知っている明治時代のキリスト者、内村鑑三がどのようにして回心したのかをご紹介します。彼は、札幌農学校でクラーク博士に出会い、そこで「イエスを信じる者の誓約」に署名して、キリスト教に入信します。入信したと言っても、まだ回心はともなっていませんでした。その後、一人の女性と結婚しますが、半年も経たずに破局しました。その後、渡米してアマースト大学に編入します。離婚したことの傷もあり、彼は心の中の自己中心的な傾向との闘いが続いていました。

そこで、牧師でもあった大学の総長シーリーは、内村に向かって次のような言葉を投げかけました。「いたずらに自己の内心のみを見ることをやめよ。君の義は君の中にあるに非ず、十字架上のキリストに在るのである。内村、君は君のうちののみ見るからいけない。君は君の外を見なければいけない。何故おのれに省みる事を止めて十字架の上に君の罪を贖い給いしイエスを仰ぎみないのか。君の為す所は、小児が植木を植えてその成長を確かめんと欲して毎日その根を抜いて見ると同然である。何故に、おのれを神と日光とに委ね奉り、安心して君の成長を待たぬのか」と。これまで、わかりかけていたものが雲を払い、十字架のキリストの贖いの意味が、明らかにさ

れたそうです。¹小さな子が、植木を植えて、その成長を確かめようとして、毎日その根を抜いているのと同然とは、なんと分かり易い例えでしょうか！私たちは内を見れば、植物がいかに成長しているか分からないのです。その根っこを見ているようなものです。神と日光に任せる、つまり神の栄光に任せて、それで安心して自分を変えられていきます。

1A 覆いを取り除かれた顔

初めにパウロは、私たちの顔から「覆いを取り除かれた」ことを言っています。これは、3章の中でパウロが、モーセのことを話しているところの続きです。モーセは、シナイ山の上で、主と顔と顔を合わせて話し、そのために主の栄光によって顔が光っていました。その輝きのために、イスラエル人は近づくのを恐れました。徐々に、指導者から近づき、そして民が近づきました。そして、出エジプト記 34章 33節を見ると、「モーセは彼らと語り終えると、顔に覆いを掛けた。」とあります。この箇所について、私は、イスラエルの民がモーセから主のことばを聞く時に、光でまぶしくないように、覆いを掛けたかと思っていました。けれどもよく読むと、彼らに語る時は、覆いをかけていません。けれども、語り終えると覆いを掛けています。そして、次に主に会うまで覆いを掛けていました。

このことはなぜか？をパウロは、第二コリントの 3章で詳しく話しています。「13 モーセのようなことはしません。彼は、消え去るものの最後をイスラエルの子らに見せないように、自分の顔に覆いを掛けました。」モーセが主と顔と顔を合わせて語っていたことによる、主の栄光の輝きが次第に消え去っていくのです。その最後をイスラエルの子らに見られないようにするために、覆いを掛けていました。このように、手動で充電する懐中電灯であるかのように、次第に明るさがなくなって、消え去ってしまうものだったのです。

ですから、パウロがここで話したいことは、そのような覆いは、すでにキリストのほうに向く者たちには必要がなくなったということです。消え去ることはないから、ということなのです。栄光が消え去るのではなく、ここにパウロが書いているように、「栄光から栄光へと」変えられていくとあるのです。一つの栄光だけで終わるのではなく、その栄光からさらに栄光へと変えられます。手動で充電する懐中電灯ではなく、いつまでも波が消えない、波を使った発電機と言ったらよいでしょうか。あるいは、一度稼働したら、なかなか廃炉にすることはできない原子炉に喩えたらよいでしょうか？次々とエネルギーを放出し、途絶えることを知らないというような意味合いです。使徒ヨハネは、福音書で、イエス様について、「この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた」と言っています(1:16)。恵みの上にさらに恵みです。波が押し寄せて、さらにその上に波が来ているようなイメージです。

パウロは、3章で、モーセを通しての古い契約と、新しい契約を対比しています。古い契約における律法において、神の栄光が現れたけれども、消え去る栄光であり、新しい栄光は、いっそう栄

¹ <http://www.ushigomechurch.or.jp/kodomo/2018%202/2018%202%202.html>

光に満ちたものだと言っています。律法においては、本質をよく表していますが、本質そのものではありません。例えば、祭壇で動物のいけにえを献げますが、それは罪の赦しと清めを約束するものの、良心にある罪の咎めまでは取り除くことができず、何度も何度も、いけにえを献げなければいけません。けれども、キリストがただ一度、ご自身が罪のためのいけにえになってくださったので、その血が、罪を心から取り除き、永遠の聖めを成し遂げてくださいました。キリストご自身が、十字架に付けられた時に、エルサレムの神殿の垂れ幕が、上から下に引き裂かれました。また、私たちの罪によって存在する、心にある覆いも取りのかれたのです。だから、尽きることがありません。栄光は消え去ることなく、栄光から栄光へと途絶えることがないのです。

ですから、私たちキリスト者がしなければいけないのは、このキリストにつながっていることなのです。しかし、人に見えるために、自分が人に認められたいと思うように、表向きの行いを求めていけば、律法主義に偏ります。自分のしていることを人の前で霊的に見せて、これこれの規則を守らなければいけないという感じで動いている人は、必ず、そこでその栄光が消え去っていきます。一見、その人は輝いているように見えます。いや、他の人たちよりも目立ちますから、見分けられないと、その人のほうが優れていると思います。霊的なことを語ります、一時期は、神のことに熱心です。けれども、メッキは必ず剥がれるのです。イエス様は、偽預言者と本物との違いは、実によって見分けられると言いました。どんなに、良いことを話していても、行いがそれを信じていないことを物語っているのです。その栄光は消え去っていくのです。しかし、律法ではなく、イエスの恵みにあずかっている人々は、覆いが取り除かれているのです。目立たないのです。地味です。けれども、着実に、その人は変えられています。キリストのほうを向いているからです。

2A 主の栄光を見る

そして、ここで大事なことは、私たちがキリストの栄光を見ているということです。「**鏡のように主の栄光を映しつつ**」とありますが、他の訳では「**主の栄光を鏡に映すように見ながら**」とあります。主の栄光を見れば、自分が鏡のようになり、その栄光が反映される、ということです。

律法の中で生きている人たちは、ちょうど、イスラエルの人々が主が語られることを恐れて、モーセに聞いてほしいと頼んだように、聖なる神、主の栄光を見ることを恐れます。自分のどうしようもない罪が明らかにされるからです。しかし、神の恵みに生きている人たちは、その罪がすでに神が聖霊によって焼き清めてくださったことを知っているのです、自分ではなく、キリストにある神の全き恵みであることを知っているのです、大胆に神の栄光を見つめることができます。私の友人で、牧師の家庭に生まれた人がいますが、その人が行っていたのは、神が、自分の欠点をあげつらう方で、何か失敗するとおしおきをされるのではないかと恐れている感じだったと言っていました。そういう状態ではあれば、神の栄光を見上げるなんていうこと、怖くてできませんね。

ロマ 5 章を開いてみてください。「ロマ 5:1-2 こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。2 このキリストによって私た

ちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」信仰によって義と認められると、神との平和を持っています。ですから、神が自分のしていることで、敵対するということはないということです。恵みに立っているのです。その恵みに立っているから、だから、「神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」と言っています。

旧約の預言者でイザヤは、この経験をしました。彼は、烈火のごとく、ユダの不正と罪を咎める預言を語りました。1章から5章にあります。けれども、有能でカリスマ性のあるウジヤ王が死んだ年に、幻を見るのです。それは、主の御座の幻、イエスご自身の栄光に輝く姿でした(ヨハネ12:41)。本文を読んでみましょう、イザヤ6章1-5節です。

1 ウジヤ王が死んだ年に、私は、高く上げられた御座に着いておられる主を見た。その裾は神殿に満ち、2 セラフィムがその上の方に立っていた。彼らにはそれぞれ六つの翼があり、二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでいて、3 互いにこう呼び交わしていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満ちる。」4 その叫ぶ者の声のために敷居の基は揺らぎ、宮は煙で満たされた。5 私は言った。「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の【主】である王をこの目で見たのだから。」

彼は、自分が咎めているユダの人々と同じように汚れていて、預言を語っているが、その唇も汚れていると嘆いたのです。そして、もう滅んでしまうと言っています。主の栄光の姿を見たからです。けれども、次、6-7節です。

6 すると、私のもとにセラフィムのひとりが飛んで来た。その手には、祭壇の上から火ばさみで取った、燃えさかる炭があった。7 彼は、私の口にそれを触れさせて言った。「見よ。これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された。」

祭壇の上では、いけにえが献げられています。その流された血によって、罪が清められます。その燃えさかる炭によって、咎が取り除かれて、罪も赦されました！これで、彼は神の憐れみと恵みを知って、主を見上げることができ、その栄光を見つ、主の命令に従うことができたのです。

主の栄光の全容を見るのは、主イエスが戻って来なければわかりません。けれども、私たちは、ここの第二コリント3章の箇所から、御霊によって主の栄光を今でも見ることができると教えられています。主を賛美することによって、主の栄光を見るでしょう。大事なものは、その歌の歌詞を見て、信仰を働かせて歌うことです。その歌詞を自分のことのようにして信仰で当てはめて歌います。その時に御霊が働いてくださいます。そして、主イエスの栄光が見えてくるのです。肉眼ではもちろん見ていません、確信の中で、心の目が開かれて、見えてきます。

そして、聖書を祈り心で読むことにおいても、主の栄光が見えます。聖霊が著者を動かして、神

のことばを書いたのが聖書ですから、その解き明かしも御霊がしてくださいます。今、みなさんがこうして、信仰を働かせて、祈り心でみことばを聞いておられます。このことを日曜日の礼拝だけでなく、毎日、毎朝、行ってほしいのです。主が今日、何を語ってくださるのかを期待して、祈って、それで聖書を開いてください。順番に読むのがいいです。デボーションもありますし、聖書通読のひと時にも参加してみてください。そこに書かれていることで、知識的に分らないことも出て来るでしょう。けれども、大丈夫です、知識的に把握することが、そこでは目的ではありません。聖霊が、語ってくださることが目的なのです。主が語って下されば、そこで主の栄光を見ることができなのです。

3A 主の似姿に変えられる

主の栄光の姿、恵みとまことに満ちておられる姿を見て、自分が変わることに何が役に立つのか？と思われるかもしれません。自分が良い行いをしていくことが、クリスチャン生活なんじゃないの？と言われる人々がいます。特に何か人の訳に立ちたいとか、社会的なことに関心がある人などが、社会活動にいそしみ、礼拝を怠るということもあります。主の栄光を見るということは、本当に、ただ見上げるだけなのです。だから、そんなことは別に役に立たないのでは？と人間的な考えで思うのです。

いいえ、そうではありません。「鏡のように主の栄光を映しつつ」と言っています。ここは、「主の栄光を、鏡に映すように見ながら」と訳すことのできる箇所です。そうすると、「主と同じかたちに姿を変えられていきます。」とあるのです。主の栄光を私たちが見ます。すると、私たちがその鏡のようになります。主の光が入って来て、そして、その光が鏡として映し出されるのです。ですから、私たちの目に入って来るものが、あたかも体全体に入って来て、そして私たちを実質的に変えていくのです。

聖書通読のひと時で、私たちは前回、ヨブ記を読み終わりました。ヨブ記の最後は、主がご自身を現し、ヨブがひれ伏します。「42:5-6 私はあなたのことを耳で聞いていました。しかし今、私の目があなたを見ました。それで、私は自分を蔑み、悔いています。ちりと灰の中で。」彼は、主の栄光を見て悔い改めました。その後で、主はヨブの友人に語られました。「ヨブ 42:8 今、あなたがたは雄牛七頭と雄羊七匹を取って、わたしのしもべヨブのところに行き、自分たちのために全焼のささげ物を献げよ。わたしのしもべヨブがあなたがたのために祈る。わたしは彼の願いを受け入れるので、あなたがたの悪行に報いるようなことはしない。あなたがたは、わたしのしもべヨブのように、わたしについて確かなことを語らなかったが。」ヨブのところに行って、主に対して犯した罪を告白しなさいということです。そして、ヨブに、罪の赦しのために祈ってもらいなさいということです。これは、ヨブにとっても挑戦です。あれだけ、自分のことを辛辣に批判し、中傷もした友人たちのために、執り成して祈るのですから。けれども、ヨブは祈りました。

このように、主を見たということで、ヨブにへりくだりの心が与えられました。そして、主を見たということで、自分に悪いことをいった友人たちを赦しました。これを、キリストの心と言わずしてなんと

いえばよいでしょうか？主と同じ姿に変えられているのです。

人は、神に似た者、神のかたちに造られました。罪によってそのかたちが損なわれてしまいました。キリストは、神のかたちそのものでした。「コロ 1:15 御子は、見えない神のかたちであり、すべての造られたものよりも先に生まれた方です。」ゆえに、この方にあつて私たちは神の似姿へと回復します。ロマ 8 章 29 節には、このことが神によって予め定められていることを知ります。「神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。」すばらしいですね、このように、神が予め決めておられるのですから、私たちが主の方を向きさえすれば、御霊が確実に、キリストの似姿に変えて行ってくれるのです。

そして、私たちは、しっかりとその御霊の働きを受け入れて行かないといけません。変えられる働きは、私たちがそれを積極的に受け入れつづけることによって進んでいきます。「ロマ 12:2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」

4A 御霊なる主の働き

ここで大事なのは、「調子を合わせる」という言葉と、「変えていただく」という言葉です。調子を合わせるは、「型にはめる」という意味です。外側にあるものに自分を合わせていくことです。変えていただくのは、内側の働きなのです。さなぎが蝶になるように、内側から変貌するのです。型にはめるのと、変貌するのでは大きく違いますね。これは自分が、一生懸命、理想のクリスチャン像の型にはめていくことではなく、御霊によって、内側から変えていただくことなのです。「これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」とパウロは、言っています。

イエス様は、御霊による新しく生まれさせる働きについて、風のようなであるとされました。「ヨハ 3:8 風は思いのままに吹きます。その音を聞いても、それがどこから来てどこへ行くのか分かりません。御霊によって生まれた者もみな、それと同じです。」風が自由に、どこに行くのか分からないように吹きますが、御霊も自由に働かれますから、どのように働かれるのか、私たちには定式化できません。パウロは、その新しくされていく働きが、とても自由なため、私たちの思いや考えを超えて、私たちの思いと異なる方法で働かれるのだということを言っています。御霊に導かれるとはそういうことです。そのためには、この世の調子を合わせる生活をやめないといけません。どんなことでも、あなたのみこころなら、どうか私を何にでもお用くださいという、明け渡した心で、御霊の働きを歓迎するようでないといけません。どうか、献げてください。そうすることによって、栄光から栄光へと、主の似姿に変えられていく自由に入ることができます。